

カリマンタン近況

服 部 清兵衛

はじめに

2800 t の貨物船に 500 t の調査器材を積んで日本を出たのは昭和 39 年 2 月のことでした。この航海を最後に廃船になるというボロ船のせいで、2 週間もの長い航海の末、インドネシア東カリマンタンのタラカン港に着いたのですが、船は私達調査団 8 人とヌヌカン島に行く 4 人の別動隊と荷物を卸ろすと、さっさと港を出て行きました。

生まれて初めて踏む外国の土、しかも当時地の涯と云われたボルネオ島（カリマンタン）で、めずらしさと心細さで感傷にひたっている私達におかまいなく港を出て行く船に、誠に無情を感じたものです。私達に残されたものは目的地附近（サハヤップ河上流）の 50 万分の 1 の地図とスピードボートを含む向う 6 か月間の調査用食料及び器具でした。そして今、昭和 62 年、23 年の年月が過ぎ去った訳です。

私はこの 23 年間、殆ど東南アジアあるいは中南米の森林開発事業に従事して来ました。中でもインドネシアのカリマンタン森林開発は私の海外での仕事の初めてのものであり、またカリマンタンとしても本格的な重機材を使用しての伐出事業は最初のものであったので、当時の思い出はひとしお懐しく感じられる次第です。

さびれたジャングル

今回 1984 年から 1985 年の丸 2 年間ふとしたことから再びカリマンタンで生活しました。仕事はインドネシア国のジャワ島の過密人口の分散を目的とする移住計画の調査と設計でした。これはインドネシア政府開発庁の計画によるもので、東カリマンタンのジャングルが対象地です。私は forest specialist と云う職名でこの仕事に従事しました。おかげで東カリマンタンの殆ど全域を陸から空から見聞するチャンスを得ました。過去 23 年、その間多くの日本人林業技術者がこの地で活躍し、その内幾人かはこの地で落命し、カリマンタンの土となっています。現在、現地で活躍しているのはわずか 2～3 人です。思えばこの 20 数年間、カリマンタンの森林は、日本の高度成長のはじめから、現在の低成長の減速時代を、たえず敏感に感じとり、行動を共にして歩んで来たように思います。そして私が目にしたカリマンタンのジャングルは、日本の木材景気の衰退と同じ様に火の消えたような感じがしました。活気を失った木

HATORI, Seibei : Past and Present State of Forestry Affairs in Kalimantan, Indonesia
国際協力総合研修所

材不況の影響をモロにかぶり、その中で必死にあえいでいるとも見受けられました。

私達の今回の調査ではサマリダ市に本拠を置きました。サマリダ市は人口30万の東カリマンタンの州都であり、大河マハカム河の河口にあることから、インドネシア最大の木材の集積地であり、最大の積み出し港でもあります。1970年代の最盛期には、この港に主として日本向けの木材積みとり船が何時も10～20隻も港せましと停泊していたものです。今この景観は全く見られません。たまにジャワ島向けの木材船が1～2隻入港している程度で他の雑貨船を加えても2～3隻が静かに滞船している程度です。原木の全面輸出禁止のせいもあり昔を思うと誠に淋しいものでした。これに反しサマリダ市を中心として、マハカム河沿岸に出来た木材工業関係の工場群は大変なものです。近代的な設備をもった製材工場、合板工場等々地元工業省が建設を承認したものが44工場で、内建設を完了し操業に入っているのは製材工場18、合板工場13、パーティクルボード工場1、接着剤工場1等で、その他建設中の合板工場が1つありました(図-1)。これらの全てが近代的設備をもった工場です。

この他サマリダ市内には昔ながらの町工場的な小さな製材工場が多くありました。これらの工場群の多くが操短を余儀なくされ、フル操業はホンの2～3工場と聞きました。倒産寸前の工場もいくつかあるとの話です。インドネシアの場合いわゆる不渡りと云うようなことがありませんので、ある日突然倒産しますから一寸コワイですね。

サマリダ市内は木材景気の名ごりでしょうか、街の道路は細い裏通りに至る迄殆ど舗装されています。マハカム河にも2車線の立派な橋が完成し、サマリダ市～バリックパバン市とはハイウェイを通じて直接車で行けるようになり大変便利になっています。昔3千台あったと云われるベチャ(人力車)は1台も見当らず、無数のミニ

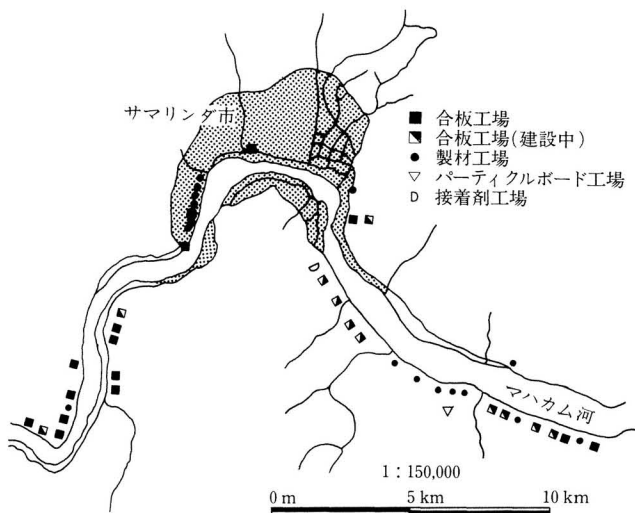


図-1 サマリダ近郊木材工業一覧

バスがこれに代って走り廻っています。何処迄乗っても 200 ルピア (30 円位) です。バリックパパン、タラカン、ブラウ等の街々も石油の町でもあるせいか、さびれた木材景気とは関係なく、仲々きれいに、にぎやかになっておりました。タラカンやブラウの町までが表通りの他に裏通り迄も舗装されているのには驚ろきました。

カリマンタンと云って必ず話題になるのが首狩り族で名の知られたダイヤック族です。私が初めてこの人達に接した 23 年前には、いかにもジャングルに住む未開人と云う感じで、男はフンドシ姿に蕃刀をさげ、女は腰巻のみの半裸体、カミ煙草で口を真赤にして、ジャングルの中のロングハウスに大家族集団で生活しておりました。今はその面影は全く見あたりませんでした。男のフンドシ姿は遂に見ることは出来ませんでしたし、女も同様昔日の姿は今はなく、そのまゝ日本につれて来てもおかしくない、あかぬけのした、きちんとした身なりをしておりました。ロングハウスは無くなり、代ってそれなりに粗末ですが、一戸建の家に大家族単位で住んでいました。また部落では大抵一軒位はテレビを持っておりました。テレビの電源はバッテリーです。但し私達の行程の及ばなかった最奥の地域には、今なお昔ながらの人達が居ると聞きました。昔、静かに川面を、小さな丸木舟を櫂を使ってこぎながらのんびりと行かっていた彼等の姿は、これも今は無く、殆どが船外機エンジンをつけたロングボートで、白波をたてゝ往きゝしているありさまです。ダイヤック族にもセチがらい世界がかなりの速さで広がってゐる様に見えました。私達がめずらしく思い、当時はまだ実用的に使用されていた槍とか吹矢は、今はサマリング市やバリックパパンのお土産屋の店頭をにぎわす品物になり変わっていました。

さて、カリマンタンの代表的な河は、なんと云ってもマハカム河です。仕事の都合でこの河の本流、支流をさかのぼり、色々と見聞して来ました。あのかつて日本に送られたいわゆる南洋材はこの河の本流や各支流から伐り出されたものが随分とあった筈です。ボートで上流に進むにつれ朽ちはてたダンピングプレースが各所で目につきます。昔は比処にロギングキャンプがあり、比処から丸太が河に落とされ、筏に組まれ、そして港までタグボートに曳行されて輸送された訳です。かつて何隻ものタグボートが係留されて、多くの労務者でにぎわっていたこの場所も、今は無惨な形骸を日にさらしています。この近くには、きまって廃棄ずみのトラクターやロギングトラック、ログローダー、グレーダー、ダンプトラック等々のロギング用重機材の残骸がゴロゴロと風雨に晒され放置されていました。日本と異り古くなった車輛の下取りなど不可能な奥地であることから、古くなった機材はそのまま現地に置き去りにされるのです。また事業が閉鎖されて無人となった事務所や労務者用キャンプも至る所で目につきます。

河面をひっきりなしに行きかった、連絡用のスピードボートや筏曳行のタグボートも、今はひっそりとしたもので、私達が 100 HP のスピードボートで 1 日走って 1 台か 2 台のタグボートに出合う程度です。メランティー銀座とまで云われたこの川筋も本当に淋しくかわってしまっていました。

ジャングルの大火災

ところでもっと大きく変わった出来事は1982年～1983年に発生した森林火災です。南はバリックパバン附近から北はブラウ地区の南側までのジャングルの焼失です。現地での情報によると旱害と森林火災により約380万ヘクタールの森林が被害を受けたと発表されています。私が見たところでは、もっともっと被害地は広い様に見えます。その筋の業者間での話では500万ヘクタール位とも云われます。正確な記録はありませんが、手元にある情報の一つに別図の様な区域が被災したとありますので参考までに掲載します(図-2)。とにかく四国か九州がスポッと入る位の面積です。被災地は一部の開拓地や湿原を除き、大部分が熱帯降雨林と云われるジャングルです。私が見たかぎりでは、特に伐採の終わった地区がひどい被害を受けた様に見えます。伐採跡地に残された末木枝条が火災の被害を加速増大したのだと思われます。空から見ると、一見なにもかわりのない緑の絨緞に見えるのですが熱帯林を見なれた私達の間からは一目瞭然に被災地であることが判明します。例の熱帯林特有のブリッコの様にモクモクしたクローネのかたまりが見えないのです。針山に針がささった様に見える所もありました。これを地上から見ると、無惨と云うか、あわれと云うか、本当にひどいものでした。林内に入ると地域的にあるいは地形的に被害の程度は様々です。

写真はいずれも被災地の中心部付近の写真です。比較的に被害の強い方のものです。

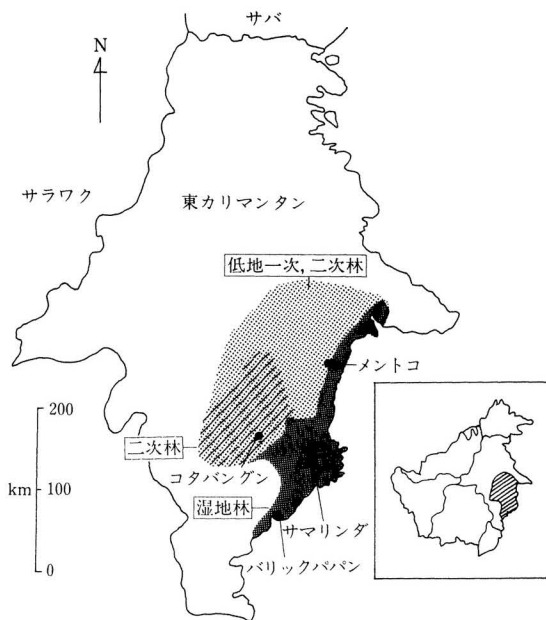


図-2 東カリマンタン森林火災図

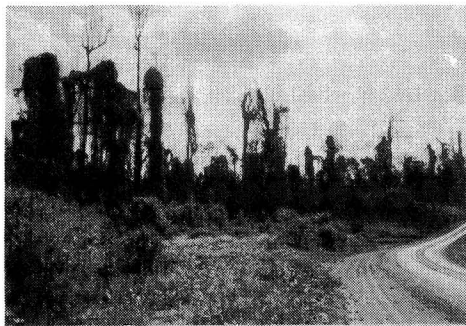


写真-1 ツル植物に覆われたジャングル被災地

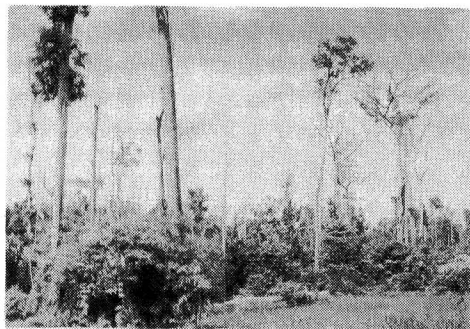


写真-2 激災地のジャングル一上，中層木が完全に焼失した所

林地が健全な森林である内は、ぜったいこの様な状態にならないのですが、あたかも死んだ動物にウジ虫がわく様に、枯死した樹木にのみツタ類が取りついていきます。本当に無気味なというか、何か森林の幽霊に出合ったような感じでした。また同じ被災地でも急速に先駆早成樹が入り込み、2次林を形成しつつあるところもあります(写真1~4)。

被災した樹種の中で、メランティ類が最もひどく、中でも樹脂の多い黄系は良く焼けていました。全域的に被災地のメランティは殆どが枯死してしまったか、枯死寸前といったところ です。被災後に芽を吹き出したものでも、樹幹の腐れがどんどん進行しているようです。ところがカプール、クルイン等で(激災地で全滅地区は別として)樹冠火の様な所では再度芽を吹き出していて、メランティの樹幹のくさる速度よりかなりおそ

い様です。サマリンド市近郊の合板工場における被災後2年の時点での聞き込みでは、被災地からの生産材ではメランティ類はクサレ、ピンホールがひどく利用価値は材積の50%以下と云っていました。これら被災地を伐区に持っている合板工場等では、表板用にブラウ地区やラウト島方面から丸太を買い入れている状態でした。この原稿の出る頃は、恐らく被災木は使いものにならなくなっているのではないのでしょうか。前記の記録の中に早害による枯死と云うのがあります。地中深く根をおろしている直径1米以上の大径木が、早害により枯死することがあるのだらうかと疑問を持ちました。手元の資料によると特に尾根筋の高木類はその25%が焼失前に既に早害により枯死していたと発表されています。月間雨量が100ミリ以上あるのが熱帯降雨林の一つの条件と云うことですが、被災地の数か所の当時の測定記録では通常雨量の1/3程度となっています。例えば10か月の早ばつの間mentokoでは通常の34.9%, Samarinda 24.3%, Kotabargun 31.5%, Balikpapan 39.5%となっています(図-3)。これですと、この期間中にはいくらか雨が降ったことになっています。ところが私が各被災地区を廻って、地元住民に直接聞いたところでは、きまって8か月間

雨は一滴も降らなかったと云います。また被災地の中心に近い所で、当時伐採事業にたずさわっていた友人の日本人技術者にも聞いて見ましたが、これも同じ様に雨が一滴も降らない期間が8か月続いたと述懐していました。いずれが本当かは別として、大変な旱魃であったことは間違いありません。熱帯のジャングルの中で仕事をした人は誰でも経験していることですが、普通ジャングル内で炊き火をしようとしても、例え幾日も晴天の続いたあとでも、湿度が高くてなかなか火が付きません。枯枝に石油をかけて、ようやくたき火が出来ると言う状態なのですが、友人の話では、当時は何処のジャングル内でもマッチ一本で簡単に火を燃やすことが出来たとのことでした。学者の話によると、Euso現象(Elnino Southern Oscillation)が原因でこの様な旱魃になったとのことで、カリマンタンとしては今世紀になって初めてこの様な大旱魃が起きたとのことでした。

山林火災の恐ろしさを知らない地元民が、こんな状態の時に焼畑をやるのですから、たまったものではないわけで、同時多発的な火事が随所で発生し類焼し続けていったものなのでしょう。特に伐採跡地には大径木の末木枝条が沢山あり、あたかもカンナグズの様にもえたとのことでした。そして乾期が終り大雨が降るまで燃えていたとの事です。

広範囲なジャングルの消失は、今後色々な後遺症を見せることではしょうが、私達がこの目で見たものは一部分で、被災地全域と云うわけではないのですが、乾期が終って気象状態が平常に戻った現在でも、川幅2~3mの水流の水が枯れてなくなり、被災前にこの水流をあてにして造られているロギング用の作業員宿舎が使用不能になり、移動を余儀なくされたと云うものが2~3ありました。

河筋の景色と云い、火災現地のある様と云い、“嗚呼栄光のカリマンタン今いずこ”と云った思い出が去来し、このジャングルの開発のために死んで行った僚友のことも思い出され、胸のつまる思いで一杯でした。静かになったマハカムの流れで、時々



写真-3 樹冠火で枯死した樹(右)とその後芽を吹き出した樹(左)。何れもメランティ(DBH 約 1.10 m)

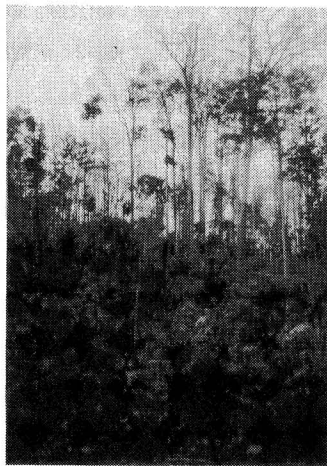


写真-4 早くも早生パイオニア種が入り込んだジャングル

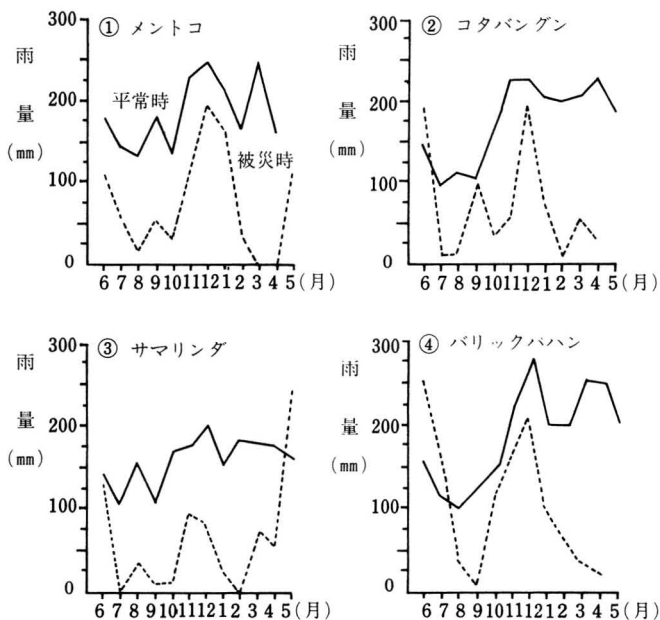


図-3 平常時/被災時の雨量比較

イルカ（淡水系の白いイルカ）がのんびりと顔を出して泳いでいました。これだけは今も昔もかわらない風景でした。

伐採跡のジャングル

今一つ気になっていたことは、私達が開発と云う名のもとに伐採したジャングルの其の後の姿です。今回の被災地域は別として、それ以外の地域のジャングルです。空から、あるいは航空写真で見るとそれらのジャングルは、網の目の様に logging road が走っており、この道路がすっかり草や木で覆われ、一見してわからなくなっています。このジャングルの中に入ると、場所により色々様子がちがうようです。私達の調査結果では、下層木の稚樹（DBH 5 cm 以下）の中にメランティを主としたフタバガキ科のものが結構含まれており、このまゝ放置されて行く限り、何時かは、元のジャングルに戻ることは確実と推察されました。比処の森林開発規則の中に DBH 50 cm 以下は伐採が禁じられています。したがって DBH 50 cm 以上は良木である限り殆ど伐採されていますが、伐採前にそれら対象木の蓄積の良かった所、悪かった所で、伐採後の今の様子が随分とちがっていました。例えば伐採対象適木が ha 当たり 2~3 本の様な所では、伐採跡とは云っても、林内環境がそれほど変化していないで稚樹の生長も良く、殆ど手つかずと云ってもわからない様な林相になっています。また伐採対象適木が多く、大径木が ha 当たり 3 本~4 本の所は、伐採時の共倒れ等の

被害木の関係で、上層木に大きく穴があき環境が変わったために2次林のバイオニア早生樹が密生していました。しかしこの中にもメランティ、カポール等の有用樹の稚樹も残って含まれており、これまた放置される限り、いつかは元の熱帯降雨林にもどるものと思われました。この点大いに安心したところです。ところが日本で良く関係者から聞く言葉に“東南アジアのジャングルが失われつつあるのは、日本が熱帯林を伐ったからではなく、あれは地元原住民の焼畑に起因している”と云うのがあります。確かに、伐採跡地は多少のちがいはあれそのまゝ事故もなく放置される限り、長い年月はかゝるにしても、確実にジャングルは元のまゝに復活される様に思います。事実その通り静かにジャングルとして今息づいています。しかし私達が残したジャングル内の網の目の様なロギングロードは、彼等原住民達の焼畑作業に大いに便宜を与えているようです。私達が20数年前に見た原住民の焼畑は、川筋を主体としたところにちまちまとありました。今、彼等はこのロギングロードを焼畑拡大に大いに役立てゝおるようです。伐採も終了しすっかりキャンプも閉鎖されている林内を歩いて見ると、林道添いのとんでもない所で、奇麗に焼払われた畑地に出くわします。昔はこんなことはなかったことですが、川筋が飽和状態になったので、これに代わり集荷搬出に便利な道路添いの地味の良い所を探して畑を作っているとのことでした。勿論この現象はロギングロードのためばかりではありません。医薬品の普及、人口の増加、小型トラックの普及、道路網等々が交じりあいこの様になったのでしょうか。今後とも無計画な焼畑の増加がジャングルの喪失に拍車をかける結果になって行くことでしょう。

森林開発が間接的にも焼畑を増加させ森林の喪失に拍車をかけていることは否定出来ないことと思います。

あとがき

仕事の都合で良く東カリマンタン営林総局に行きました。此処の局長さんは私共の20年前のカウンターパートの1人でした。大学を出たばかりの青年だったのが、今では白髪の初老の紳士になっていました。その他に大勢の当時の若い人達が林業省や林業公社の大幹部になっていて、それらの人達がことあるごとに私の仕事に便宜計って呉れたことは何よりも嬉しいことでした。私が任期を終了してカリマンタンを去る時は、営林局長の彼は熱っぽく私にこんなことを云いました。

“山火事でジャングルはすっかり荒れてしまった。日本の誰かこの山に造林をして呉れる人を探して欲しい。本当にやって呉れるなら10万や20万ヘクタールは用意する。伐採権も輸出権も与えられると思う。誰か探して呉れ。あんたは昔ブラジルで大きな造林プロジェクトの設立に参加したではないか、このインドネシアでも企画してやれないものか？、一つの企業造林が成功したら皆がやるようになると思う。本気でやって呉れるなら、たいていの便宜なら提供出来る筈だ。誰か探して欲しい。焼け跡がこのまゝならジャングルがなくなる”。私は帰国後、その筋の人達にお話をして見ましたが反応はありませんでした。私自身もあまり大きな話でどうすることも出来ません。日本の皆さん誰かこの山を救って呉れませんか。